



志賀 利明さん・絹子さん(北幾世橋)

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎 江川
取材日：9月10日

こころ落ち着く毎日



▲浪江のご自宅で

利明さんは透析治療を受けるために町内の病院に連絡を入れた、最後に通院をしたのが3月

夫婦でからだをいたわりながら、浪江町内の自分の家で暮らす毎日。
震災前の暮らしが少しずつ戻ってきました。

◆持病を抱えながらの避難
利明さんは、震災前は重機のオペレーターとして、仕事をしてきました。利明さんは持病を抱えながらも働き、妻絹子さんも共に働いての生活を送っていました。震災の日、利明さんは通院の日でした。診察を終え、ちよど家に戻って休んでいる時に大きな揺れがありました。津波が気になり海の方に向かってたりしながらも、絹子さんが仕事先から戻るのを心待ちにされていたそうです。絹子さんは、大渋滞の道路を遠回りして帰宅、家族の無事を確認し、その夜は停電している中で食事をとりました。

利明さんは透析治療を受けるために町内の病院に連絡を入れた、最後に通院をしたのが3月

◆二人で支え合いながら
昨年11月の準備宿泊が始まった時に、浪江に戻ったのですが、浪江の家は、長い避難生活の中で修理が必要になっていました。ボイラーの故障など、少しずつ修理して、住めるようにしてきました。今では、戻ってきてまだまだ家の修理が必要なご近所の方に、お互いさまの気持ちでお風呂を使ってもらっています。

◆暮らしを取り戻す
現在、息子さん二人は郡山市に住んでいます。時々行き来をしながらお互いの生活を取り戻しています。家の周りには、イノシシやアライグマ、ハクビシンも現れるので、「獣害対策の電気柵は欠かせない」と言います。

時間の流れの中で少しずつ、自分たちの体にも変化が起きてきています。「それでも、自分の家はなんとなく落ち着く」といいます。「安心」を手に入れることができたことが、幸せというお二人でした。



▲平成28年11月に準備宿泊が可能になった時、福島民報に掲載された記事を見せていただきました。(福島民報 2016年11月2日掲載)

浪江のこころ通信

・第77号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散避難をしています。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるため一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されています。

この「浪江のこころプロジェクト」は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第77号」への感想をお寄せください。
【連絡先】〒979-1592
双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田7-2
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0240(34)4593





佐藤 美峰さん(川添)

取材者：NPO法人まちなか研究所わくわく 宮道・下地
取材日：9月27日

子どもたちとの生活を大切にしたい



▲美峰さんとお子さんの
吉天君(左)と怜ちゃん(右)

震災後、1か月ほど徳島県で過ごし、その後平成23年5月に沖縄に移り、現在は沖縄県北谷町で生活されている佐藤さん。
4歳と10歳のお子さんと一緒に過ごす沖縄での生活についてお話を伺いました。

◆子どもたちが環境にすぐに馴染めて良かった
沖縄に来てすぐに子どもを保育園に通わせることができた。ほかの子と遊べる環境が欲しかったので入園できて良かったです。沖縄の子どもたちはすごく懐っこいので、うちの子はすぐに馴染むことができました。北谷町は、外国の方が多く住むまちです。保育園にも外国の子どもたちがいるので、子どものほうが私より英語を理解しているはず。英語に触れる環境があることは、子どものためになるので、この環境はすごく気に入っています。

◆タヒチアンダンスとの出会い
沖縄に来た頃、私は友達もいなくて、家に引きこもりがちで、家族としか話がない状況



▲タヒチアンダンスを踊る
美峰さん

◆親戚に会いたいときすぐに会いに行けた浪江町の暮らし
浪江町で暮らしていたときの環境は、家の隣に田んぼがあり、交通量も少なく、本当に静かな環境でした。ご近所付き合いもあり、人とのつながりが強く助け合いがあり、子どもを育

でした。このままでは自分はダメになってしまおうと思っていた時、イベントで初めてタヒチアンダンスを見ました。偶然、自宅近くにダンスのスタジオがあると聞き、スタジオに通い始めました。ホテルでのショーやビーチでのイベント等にも出演させてもらえるようになり、最近では、子どもと一緒に踊っています。タヒチアンダンスは、私にとってストレス発散になっていきます。ダンスを通して友達も増え、沖縄の暮らしや文化をたくさん経験させてもらっています。タヒチアンダンスとの出会いは沖縄での生活を続けていく中で大きな出来事でした。

◆沖縄に来て良かった
沖縄は、海で遊んだり、遠出してキャンプに行ったりと、子どもと一緒に遊べる環境がたくさんあります。友達家族と遊びに行くのがとても楽しいし、外で遊んだほうが子どもたちも強くなっていくような気がします。沖縄で経験したこと、出会った人のことを考えると、沖縄に来て本当に良かったと思います。
今、子どもがやってみたいと言っていたスケートボードを子どもと一緒にやっています。これからは海に行ったり、スケートボードをしたり子どもたちと過ごす生活を大切にしていきたいです。

てる環境としてパークエクトな場所だと思っています。親戚同士も仲が良く、従妹や祖父母もすぐ近くに住んでいて、会いたい時に会うことができました。その環境がとても好きで、自分の子どもにも味わわせてあげたかったなとすごく思います。現在、親戚は福島県、群馬県、千葉県にいます。浪江町は、田舎でもあります。浪江町は、会いたいときに友達や親戚に会えていた環境は、幸せなことだったなと今になって思います。近くにみんながいる震災前の環境に戻ることができたなら、子どもを連れて浪江町で生活したいと思うくらい良い場所です。



菅野美勇士さん・智子さん(西台)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：9月24日

支援者のご厚意で箱根旅行を楽しみました！



▲菅野さんご夫妻と、雄斗君、暖人君、菜里ちゃん

美勇士さんは双葉町、奥様の智子さんは浪江町生まれ。高校の先輩・後輩に当たり、ご結婚後は浪江町西台地区で暮らしていました。現在は長男の雄斗君(8歳)、次男の暖人君(5歳)、菜里ちゃん(2歳)とご家族5人、いわき市内の復興公営住宅で元気にお過ごしです。今年4月には箱根湯本温泉組合の招待で箱根への1泊2日旅行を楽しめました。

◆地域にだんだん馴染んできた
美勇士さん 震災後は親戚のいる長野県に避難しました。それから3か月ほど猪苗代のペンションにお世話になった後、僕の仕事の都合で千葉県、茨城県に移転し、4年前にいわき市に来たんです。
智子さん その時はいわきに避難した方が多かったので貸し物件が見つからず、大変でした。今住んでいる復興住宅に入れたのは約1年前です。ママ友もできたし、何年も経てば第二の故郷になるのかもしれないですが、まだ落ち着かない感じがですね。
美勇士さん でも、長男が小学校に入ってから地域の子ども会に活動する機会も増えました。こないだは諏訪神社のお祭りで

◆家族で楽しんだ箱根旅行
美勇士さん いわきに来てからは家族で温泉に行ったり、漁師体験のイベントに参加したり、家族で過ごす時間を大切にしています。一番の思い出は箱根旅行ですね。被災地支援で箱根町から浪江町役場に派遣された方がすごく良い方で、その方のおかげで、箱根湯本温泉組合が毎年1、2組、浪江に住居登録のある人を箱根に招いてくれていたんです。今年は運よく抽選に当たったので、家族5人で箱根に行ってきました。
智子さん ホテルに1泊し、翌日は大涌谷や美術館に案内していただいたんです。箱根も一時は火山が噴火して風評被害に遭いましたが、私たちが行った時はすごく賑わっていました。温泉もよかったですしホテルのお料理も美味しく、温泉組合の方の娘さんも手伝いに来てくれて、子どもの相手をしてくれたのもありがたかったです。
美勇士さん 僕は以前、長距離走をやっていたので、箱根駅伝の名所に案内してもらえたのが一番嬉しかったです。テレビで中継する箱根駅伝の道を生で見られて感動しました。



▲箱根の名所「玉簾の滝」の前で、支援してくれた箱根の皆さんとともに

◆浪江への想い
美勇士さん 僕は双葉出身なんです。浪江もそうですが、双葉は海が本場にきれいで、仲間とよくキャンプを楽しんでいました。また昔みたいに戻れたらいいなと思いますね。
智子さん 私は、浪江で一番思い出深いのはやっぱり十日市。あの賑わいが懐かしいです。
美勇士さん・智子さん 将来、どこに家を持つかは決めかねています。浪江に戻りたい気持ちはあるけれど、うちは子どもが小さいのでやはり線量が気になって。山の方も除染してもらい、安心して暮らせるような浪江になればと願っています。